



CharmingTimes

特定非営利活動法人CHARM
Center for Health and Rights of Migrants

目次 Index

CHARM主催プログラム

日本WHO協会「だれひとり取り残されない外国人医療」事業	2
森を創るプロジェクトの研修の総括	4

CHARM活動レポート

多文化キャンプ	6
日本エイズ学会学術集会・総会参加、ポスター発表	7
医療通訳研修	10
バザー出展	11

CHARMERの紹介 今号のCHARMERのみなさん

① 藤井航さん ② 松浦基夫さん ③ 井上維佳さん

Network QWRC(くおーく) 織田佳晃

HIVと人々 インターン報告 森田陽花

事務局から

CHARMは「すべての人が健康(すこやか)に過ごせる社会」を目指して、日本に
くらす外国籍住民も医療/福祉にアクセスできる環境を地域の人々や他機関と
ともに創っています。またHIVと共に生きる人々を多言語で支援しています。

CHARM is "building a healthier society for all" through network with organizations
and individuals to create environment where medical and welfare services are
accessible to foreign residents. CHARM also provides multi-language support for
people living with HIV.

フルバージョンはCHARM ホームページまで！

www.charmjapan.com



日本WHO協会「だれひとり取り残されない外国人医療」事業の実行団体に選定されました。

青木理恵子 (CHARM事務局長)

CHARMは、日本WHO協会が募集した「だれひとり取り残されない外国人医療」の実行団体の1つとして採択され2025年10月から2028年2月まで約2年半事業を展開します。

CHARMは、感染症分野のこれまでの経験を活かして、外国籍コミュニティー、保健所等、医療機関の連携をさらに強化し、感染症を超えた分野にも広めることを進めます。

同事業の特徴は以下の3点です。

1) ヘルス・ケアワーカーの養成

これまでサービスの受け手であった外国籍住民の中に研修を受けてヘルス・ケアワーカーとなる人々を養成します。日本の健康保険制度、医療制度、福祉制度などについて知識を持つことで、その人の周りの人たちが医療や支援を必要とするときに、一步を踏み出すことができることを目指します。その人たちが孤立することなくCHARM事務局及び医療従事者等はワーカーをバックアップして必要に応じて早期の受診につなげます。

ヘルス・ケアワーカーは、アジア諸国やアフリカなど医療従事者が不足している社会では、感染症対策や母子保健など公衆衛生の分野で大いに活躍していますが、専門職が担ってきた日本では大きく取り上げられることはありませんでした。



ワン・ワールド・フェスティバルでの講演

日本は毎年外国籍住民の数が増加しているにも関わらず、多言語支援は保証されていません。多言語支援制度確立に向けて現時点で必要なのは、外国籍住民の人材開拓とその人たちを支えるしくみであるという結論に至りました。

2) 日本語を解さない人がいつ来ても困らない保健所の検査体制

誰でも罹患する可能性がある性感染症は、定期的検査を受けることが感染予防行動の一つとして重要です。大阪府下の保健所でも無料匿名でHIV/STI（性感染症）の検査を行っています。若い年齢層の多い外国籍住民は検査への関心が高く、保健所等で検査を受けたいけれども言葉がわからないという問題があります。



多言語受検情報の一部

受け入れる側も医療通訳体制がない中で外国人受検者の対応には苦労が伴います。自治体では必要な資料を外国語に翻訳して配布し、翻訳機を駆使して意思疎通をしています。CHARMは、2025年度から大阪市/府委託の検査会場で試験実施している多言語受検情報動画を8言語で作成して保健所等と相談しながら、大阪府下31ヶ所の検査会場で活用することを目指します。来場者が自分の携帯で動画を見ることで検査前後に必要な情報を得て、HIV受診時には医療通訳が同行できる体制を構築します。

3) 大阪市立の病院に外国語で対応できる体制を

大阪では、大阪府立病院機構の5病院(大阪急性期大阪市立総合医療センター、

大阪はびきの医療センター、大阪精神医療センター、大阪国際がんセンター、大阪母子医療センター)で医療通訳サービスが無料で利用できます。

<https://www.opho.jp/interpreter/>

しかし、大阪市立の病院には多言語の支援制度はありません。大阪市立病院は公的医療機関として広く市民に開かれているだけでなく、各種拠点病院として他の医療機関では診ることができない困難症例を多く受け入れています。説明が複雑である場合には、患者や家族が理解できる言語で意思疎通ができて医療従事者と信頼関係を築いた上で療養支援が行われることが必要です。CHARMは、市民病院の医療従事者、医療ソーシャルワーカー、その他事務局の方々と話し合いを重ね、合同で研修を行うことを通じて自治体と共に外国籍の人たちが安心して医療を受けることができる医療機関を作ることを目指します。

2026年2月に梅田スカイビル・タワーウエストで開催された第33回ワン・ワールドフェスティバルの中で日本WHO協会が開催したセミナー「だれひとり取り残されない外国人医療」に登壇し、プロジェクトについて知ってもらう機会を持ちました。医学生を中心に多くの質問があり、外国人の医療に関心を持っている若い人の存在を感じて心強く思いました。

森を創るプロジェクトの研修(全3回)の総括

2025年12月20日(土) 14:00～16:30、日本キリスト教団東梅田教会にて、「森を創るプロジェクト」振り返りの会を実施しました。

これまで実施した3回の研修「排除と差別はどこから…？」

- ・ 第1回：「医療による排除と差別」
(2025年5月31～6月1日)
- ・ 第2回：「外国人政策による排除と差別」
(7月12日)
- ・ 第3回：「家族主義による排除と差別」
(9月20日)

研修を通して共に経験したことを振り返り、感じたことや発見したことは何か。そして、今後、「森を創るプロジェクト」(以下、「森を創る」)やCHARMへの期待について、グループに分かれて話し合いました。

＊全3回の研修内容詳細については、ホームページをご参照ください。

●参加した感想を抜粋、まとめ

- ・ 自分の考え方、気持ち、癖を理解するきっかけになった。自分を大切にしないと人を大切にしないと思った。
- ・ 対象者にならないグレーゾーンの人はどうなるのか。地域NPOが助け合うこと、国が支援しないといけないが自分たちも支援することが大切だ。
- ・ 自分の意見で他の人が生き苦しくなることもあるのではないかと。自分が変わることは難しい。選挙権も無い外国人であ



第1回 医療による排除と差別



第2回 外国人政策による排除と差別



第3回 家族主義による排除と差別

る自分、第2等市民である。発言したことがどこまで反映できるか、自分の意見を理解してくれる仲間を増やすことが大事。知らないことが差別に繋がっている。

- ・森を創るイメージで、高さの同じ木と思った。自分がどの様な役割で参加できるのか心配であったが、形は違っていても良いと思った。また、方法は色々あるが、皆が共有しやすいことが必要だ。

- ・ヘイトの対象は顔が見えない、自分の知っている人が多くいけば良い方向となる。

- ・自分の居心地が心配だったが、逆に良かった。自分のアイデンティティを話せる場所が良い。

- ・個人的に何をしてほしいとは思わないが、CHARMでは自分を見せて良いと思った。

- ・活動を深め、1歩踏み出せた。

●これからの森を創るに関して、今後新たにやっていきたいこと、またはCHARMに期待すること。

CHARMについて

- ・維持は大変であるが、シンプルで永く活動してほしい。また居心地が良いことを期待する。他では話せないことを話せる空間。そのため、話の前にグランドルールが守られ、安心して話せる、マイノリティを吐き出せる場所。

- ・帰って来られる場所として、CHARMランチは復活させたい。

「森を創る」について

- ・色々な分野で頑張っている人の横のつながりがないので、お互いを知り、参加者が講師になり、相談などで繋がる。広めながら森にしていく。森の作り方を豊かにする。つづけることの意味を明文化していく。

- ・普通の人は見えていない視点なので、どのようにスポットライトを当て、見える様にしていくのか1歩踏み込むことが必要。居心地の良い場所にしていく。

- ・人に踏み込む怖さは有るが、知り合っていきたい。自分の話をし、伝え、チャレンジしていきたい。

- ・人権や差別に対しては、沢山の人の見ってもらうためタイトルをわかりやすくしてはどうか。取り組みは続けてほしい。

- ・排除、差別：社会へ挑戦、戦うではなく、理解者、味方を増やしていく。問題意識、課題を巻き込んで進めていく。

●来年度以降も「森を創る」を継続していくことになりました。そのため、

- ・2025年度「森を創る」に1度でも参加した人が加入できるメーリングリストを残し活用します。

- ・メンバー間の情報共有や、これからは「森を創る」の参加者と一緒にプログラムを企画し、提案する場とします。

- ・イベントや企画を検討する際、CHARMのホームページなどでもお知らせします。プログラムの運営協力も大歓迎です。今後ともよろしくお祈いします。

● 多文化キャンプ オンバダ香織 (CHARM事務局)

今回の多文化キャンプは2025年9月13日(土)・14日(日)に開催しました。参加したHIV陽性女性は11名(うち外国籍3名)と例年より少ない人数となりましたが、子どもは3歳～15歳までの13名、医療従事者は医師、看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカー合わせて6名、CHARMスタッフ3名の合計33名でした。近年、多文化キャンプの活動に関心を寄せてくださる医療従事者の方々が増えてきており、4名の方に初めてご参加いただきました。一泊二日を共に過ごしますので、女性たちはこの間いつでも医療従事者に相談できる、というのがこのキャンプの特徴です。さらに今回は座談会を開き、女性たちが出し合う日々の疑問に医療従事者の方々に回答をいただき、知識や情報をシェアする機会を持ちました。活発な質疑応答の中に女性たちの経験談なども加わるのですが、これは安心して語れる場であるからこそです。女性たちが「ひとりではない」と思えるのは、こうやって過ごすひと時なのだな、と改めてこのキャンプの場の

力を感じた時間でした。女性たちからは「ここでなければ語れないことがある貴重な場」「同じ病気の方々と話せることが喜びであり、心強さを感じる」「疑問や思いをシェアし、医療者と話せる機会もあって充実した時間だった」等の感想をいただきました。

また多文化キャンプは2007年にスタートして以来、ずっと同じ宿泊施設を利用しています。京都の大自然の中にあるこの施設は今年60周年だとのことですが、そのうちの18年、この多文化キャンプを受け入れ続けてくださいました。キャンプが始まった頃に来ていたお子さんは、すでにキャンプを卒業し、もう成人して社会人です。また数年前にヨチヨチ歩きだった子が、今では慣れたキャンプ場を駆け回っているという光景も見られたり。今年の最少年齢は2歳でしたが、子どもたちの成長が見られることもキャンプに参加する楽しみのひとつです。



2025年12月5日から12月7日まで熊本市の熊本城ホールで日本エイズ学会が開催され、CHARMからもスタッフ数名が参加しました。

今回のテーマは「HIV検査再考」で、郵送検査がいろいろな場面で話題に挙がっていました。

CHARMでは行政からの委託で2002年から2009年まで土曜日常設HIV抗体検査相談事業(SAT)を実施していました。それは私がCHARMと関わる前の話ですが、そのときから陽性告知時のカウンセリング、陰性告知時の予防教育を今までずっと大切にしていることは日々の活動の中で感じています。確かにこれまで保健所や医療機関へ行って検査を受けることができなかつた人にとって、郵送検査は手軽に自宅で検査が受けられる、とても便利でハードルの低い手段になると思います。郵送検査をきっかけに多くの人が自分の健康に関心を向けられるようになることは素晴らしいことです。しかし、もし陽性(要確認検査)の結果を自宅でひとりで受け取ったら…。そのあたりの対策はまだまだこれから改善していく必要があると感じました。いろいろな機関が検査へのハードルを低くするための取り組みをされています。郵送検査についても正しい情報発信ができるよう、これからも注意して見ていきたいと思っています。

また、今年は「女性HIV陽性者の集いー『多文化キャンプ』18年の軌跡ー」「日本に移住するHIV陽性者が治療を継続するための実践」という2つのテーマでポスター発表を行いました。ありがたいことに移住者支援についての発表では2年連続優秀演題賞をいただくことができました。どちらのポスターも多くの人に足を止めて見ていただき、CHARMが20年間コツコツと積み上げてきた活動をみなさんに知っていただく良い機会にすることができたと思います。

来年は岡山での開催です。学会で得た知識と出会った人たちのおかげで「あんなことやりたい!」「こんなことしなきゃ!」とアイデアがいっぱい溢れています。岡山では「こんなん始めましたよ」と少しでもみなさんにご報告できたらと思います。



第39回日本エイズ学会学術集会・総会でのポスター発表

● 女性HIV陽性者の集い「多文化キャンプ」18年の軌跡

背景

- ◆ 2002年、エイズを発症して、重症化するまで医療機関を受診出来なかった外国人女性HIV陽性者に会ったのをきっかけに、CHARMが設立された。
- ◆ 日々の暮らしの中で女性HIV陽性者同士が出会うことはほぼ皆無であり、また自身の感染を周囲は知らない、あるいは限定的であることが多く、病気に関連する不安や悩みを話せる相手がいない。
- ◆ CHARMが支援した女性HIV陽性者、特に外国人女性のHIV陽性者は同じ立場の人と出会うことは難しく、孤立しがちなため、交流する機会の必要性を感じた。

目的

- ◆ 他者との出会いで個々がエンパワメントされ、互いの力となっている『多文化キャンプ』の軌跡を紹介する。
- ◆ 多くの人々に女性交流会の活動を知らせることで、女性HIV陽性者同士の繋がりを広げていく。

実践の内容

- ◆ 2025年6月現在、女性交流会には61名（うち18名は外国籍）の女性HIV陽性者が登録。
- ◆ 毎回20人前後、延べ279名の女性が参加しており、2010年以降は各回新規2~3名、外国籍女性4~5名の参加がある。
- ◆ プログラム中は、個々の語りに対する傾聴や共感、必要に応じてお互いの経験を語り合い、意見交換、情報交換を行うことで、不安・悩みを軽減し安心に繋げている。
- ◆ 医療従事者が参加しており、健康や医療に関する勉強会を開催したり、個別相談を実施している。

実践の評価

- ◆ 多文化キャンプは病気を隠すことなく、自分について語ることが出来る唯一無二の場であると語る女性が多い。
- ◆ 特に病歴の浅い方は、長期間HIVを持ちながらも自分らしく生きている方の姿が励みになっている。
- ◆ HIV感染症や女性という共通点を持つ人たちが創り出す安心感と信頼から、参加者はキャンプで出会った仲間を『家族のような存在』と言い、かけがえのない繋がりは少しずつ広がり続けている。
- ◆ 18年の積み重ねの中でできた『ありのままのあなた/私でいい』『あなた/私は大丈夫』と思える空間は女性たちが自然に作り出すものであり、それはグループの文化となり、お互いを包み込む力となっている。

今後の課題

- ◆ 毎年新規の参加者はいるが、女性交流会の存在はまだ十分に知られていない。
- ◆ 近年、外国籍のHIV陽性者は増加傾向であり、言葉の壁を超えて情報が広く行き渡る工夫が必要である。
- ◆ 多文化キャンプやオンライン交流会に参加できない方も参加できるように、地方でのプログラム開催についての検討。



2005年～

- ・多文化キャンプの前身『親子野外プログラム』スタート。
- ・当初は配偶者と一緒に参加したが、後に女性と子どものみ。

多文化キャンプとは

年に一度、一泊二日、外国籍を含む女性HIV陽性者を対象としたプログラム。希望者には交通費の助成を行う。子どもと共に参加可能で、子ども用のプログラムがあり親子は別々で過ごし、他の参加者との交流の時間を心おきなく楽しむことが出来る。HIVに詳しい医療従事者も参加し、相談できる時間も設けている。

2007年～

- ・全国女性交流会として、『多文化キャンプ』開始。
- ・自然に囲まれたリゾート施設で、覆食をともに過ごす。
- ・北は北海道から南は沖縄まで日本各地から、国籍や年代を問わず女性たちが集う場へ。



2015年～

- ・他の女性HIV陽性者との出会いで、互いに支えあってきた経験が、まだ出会っていない女性たちの希望となるよう『For Women』『つむぐひと』日本で出産・子育てをする外国人親の皆さんへ』の3つの冊子を製作。
- ・グループのダイナミクスを目に見える形で表現することへのチャレンジ。



2020年～

- ・COVID-19(パンデミック)により多文化キャンプは3年間中断。
- ・その間も女性たちが繋り続けられるよう、2ヶ月に1度のオンライン交流会をスタート。
- ・2023年から多文化キャンプを再開。
- ・思い出の場所での再開の喜びは、更に女性たちの絆を深めることに。
- ・近年のキャンプでは合唱をしたり、故郷本での子さんを偲んでのメモリアルキルトづくり、支援者へ感謝の手ぬいづくりなど、皆で何かをつくりあげることで、より調和のとれたグループへと成長している。

● 日本に移住するHIV陽性者が治療を継続するための実践

背景

- 特定非営利活動法人CHARM（以下CHARM）は「すべての人が健康に暮らせる社会」を目指して、日本に移住するHIV陽性者が途切れることなく治療を継続できるよう国籍に関わらず支援している。
- 2022年以降、来日するHIV陽性者からの相談は年々増加している。

目的

- 海外で抗ウイルス治療を開始したHIV陽性者が日本に移住して治療を開始した際、医療機関は「発生届」を提出する義務はないため、移住HIV陽性者の実数を把握できる統計は無い。
- 2022年4月から2025年3月の間にCHARMが移住HIV陽性者支援の為に実践した内容を分析し、傾向を明らかにする。

実践の内容

- CHARMはホームページ上にて10言語で健康に関する情報を提示しているおり、お問い合わせフォーム（メール）、LINE、電話で相談を受け付けている。
- 2022年4月から2025年3月までの3年間に新規に相談を受けた者の内、日本でHIV治療を継続するための支援を行った者は58名であった。その内全国のエイズ治療拠点病院の受診につながった者は53名であった。
- 言語面で不安がある者へはCHARMから対面及び遠隔で医療通訳を派遣した。

実践の評価

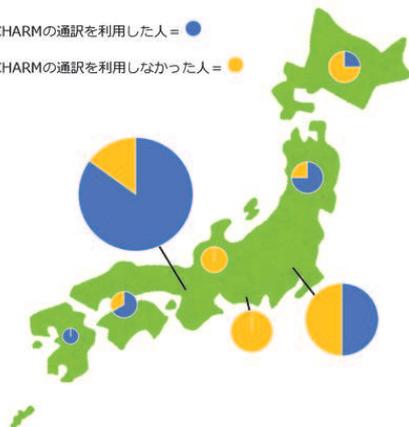
- 2022年度から2024年度にかけて移住HIV陽性者からの相談は約3倍に増えた。これは、HIVがコントロール可能な慢性疾患であるとの認識が定着したためと思われる。
- 移住HIV陽性者の相談は関東圏や近畿圏から多かったが、それ以外にも特に外国籍住民が集住する地域がある地方からの相談もあった。
- CHARMからエイズ治療拠点病院を紹介した者の約57%にあたる30名が受診時にCHARMの通訳サービスを利用した。片言の日本語や第二言語で日本のHIV診療システムを十分に理解することは難しく、自分の理解できる言語でコミュニケーションが取れることが重要となる。
- 北陸、東海地方でCHARMの通訳利用者がいなかったのは、エイズ治療拠点病院がその地域の支援団体と医療通訳についてすでに協力関係を構築していたためである。
- 2024年度からは東京に拠点を持つ特定非営利活動法人シェア＝国際保健協力市民の会と協力し、お互いの拠点がある地域以外からの相談については相談者の了承の上引き継いで支援を継続している。

まとめ

- 日本に移住するHIV陽性者が安心して治療を受けるため、全国のエイズ治療拠点病院や支援団体に対し、CHARMが提供しているサービスを広報していきたい。
- CHARMが支援した58名の中には、母国から持参した薬が無くなってから相談につながったケースもあった。日本への移住を考えているHIV陽性者が来日前から準備ができるよう、各国の支援団体とのネットワークを築いていきたい。
- CHARMが支援した58名の内5名は、母国で早期に治療を開始したため日本の身体障害認定の基準を満たす免疫が低いことを示す血液検査の結果がなく、身体障害の認定を受けることが難しかった。そのため、エイズ治療拠点病院の受診を希望しなかった。国境を超えるHIV陽性者が、来日後にすみやかに治療継続ができるような医療費助成制度の確立を求めるものである。

受診時にCHARMの通訳を利用した人 = ●

受診時にCHARMの通訳を利用しなかった人 = ○



	移住HIV陽性者 合計数	CHARM通訳 利用者合計
北海道	4	1
東北	4	3
関東 甲信越	12	6
北陸	3	0
東海	5	0
近畿	20	17
中国 四国	3	2
九州	1	1

※ポスターの内容の一部を加工しています。
実際のポスター及び発表者氏名・
所属はホームページでご覧いただけます。

2025年度も「在留外国人に対するHIV検査や医療提供の体制構築に資する研究班」からの委託を受け、結核とHIVに関わる医療通訳研修を実施しました(オンライン、下記日時：各日9時～13時)。

今年度は新規登録者だけでなく、登録していながら実際の活動につながっていなかった通訳者もターゲットとして研修の内容を組み立てました。

・対象：保健所、医療機関などから外国人の感染症患者(結核とエイズ)を支援するための通訳を行う医療通訳者、新規登録希望者、及びすでにCHARMに登録している医療通訳者です。近年増加している多様な言語に対応できる人材を養成するために日本語以外の言語を母語とする人々が参加しやすいプログラムとしています。

・目標：結核、HIV、HIV検査に関わる知識を身に付け、それをもとに担当言語と日本語の用語集を作成します。毎回の講義を通し単語の数を増やし、用語集を作成する習慣を身につけます。その用語集を用いてロールプレイで実践しながらの通訳役を務めることで、通訳者としての経験を積み、評価を受けます。

・講座内容及び受講者の担当言語、人数
第1部(9月23日) 受講者数：20名(言語；英語、中国語、フィリピン語、ベトナム語、ネパール語、ミャンマー語、インドネシア語1、ドイツ語1)、杏林大学院生

内容：HIV/結核の基礎知識。HIV検査流れ。

第2部(10月25日) 受講者数：19名(言語；英語、インドネシア語、中国語、ベトナム語、フィリピン語、ネパール語、ミャンマー語、ドイツ語)、杏林大学院生

内容：通訳練習；クイックレスポンス、リプロダクション、ノートテイキングそれぞれについて講師が説明後、グループに別れて練習。医療通訳者のセルフケア。HIV検査後の陽性告知のカウンセリングと通訳。

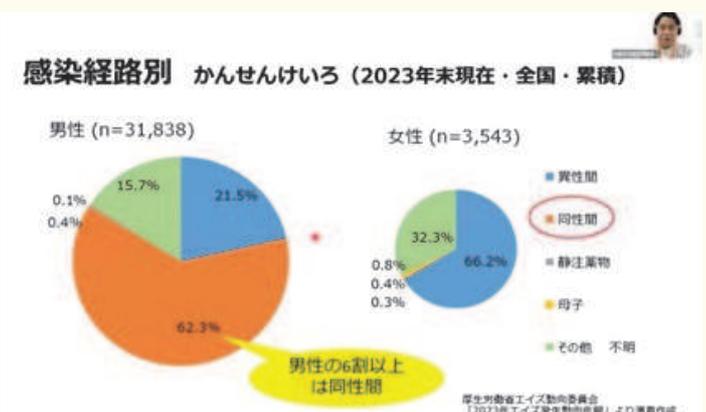
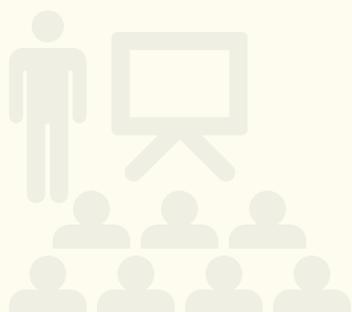
第3部(11月29日) 受講者数：12名(言語；英語、ベトナム語、インドネシア語、フィリピン語、ネパール語、ミャンマー語、ドイツ語)、杏林大学院生

内容：HIV/結核に関係する保健医療制度。外国籍住民が利用できる保健医療制度。理解を確認するためのテスト及び、回答内容から不足している知識のフォロー。医療通訳の倫理と役割。

第4部(12月20日) 受講者数：11名(言語；英語、ベトナム語、フィリピン語、ドイツ語、中国語)、見学：インドネシア語、英語

内容：HIV検査時、結果返し(陽性告知)場面での受検者と保健師の間の通訳(ロールプレイ、ベトナム語/英語/フィリピン語)。通訳困難場面での対処方法。

終了後の登録状況：6名が新規通訳者として登録しました。



● 各地のバザーに出展しました

昨秋に様々な団体で行われているバザーに出展して寄付品や委託品を販売しました。

バザー出展の目的は以下の3つです。

- 1) 教会と事務局スタッフが顔の見える関係を築くことによりプログラムへの参加や会場使用等が可能となる関係性を築く、
- 2) 休眠預金活用事業で実施するヘルス・ケアワーカーの協力者及び団体を見出す、
- 3) CHARMへの募金

出向いた先は以下のところです。

- 10/19 カトリック大阪高松大司教区インターナショナルフェスティバル
- 11/3 日本キリスト教団 大阪教会フリーマーケット
- 11/9 日本キリスト教団 浪花教会バザー
- 11/22 バザールカフェ・フィエスタ
- 11/23 日本キリスト教団 西九条ハニル教会

CHARMへの募金は、22,185円でした。



CHARMERの紹介

CHARMERの皆さんを紹介するコーナーです。CHARMERとは日頃からCHARMに関わってくださっている会員、サポーター、当事者、そして事業に関わってくださっている全ての方々の総称です。

次はCHARMERのあなたにもお願いするかも知れません。その際はぜひご協力ください。

● 紹介項目

お名前

- (1) CHARMとの出会い
- (2) CHARMでしていること
- (3) CHARMに関わってよかったこと
- (4) 今後どのように関わっていきたいか
- (5) 好き、またはおすすめの食べ物/本/その他
- (6) CHARMへの思いや、他のCHARMERのみなさんへの一言！

① 藤井航 (ふじい わたる) さん

(1) 神学部で出会った榎本てる子先生を通して、学生時代に初めてCHARMと出会いました！連れて行ってもらったあと、近くでお寿司を食べたのを覚えています(笑)。活動や皆様との出会いは大きな影響を与えてくださいました。今行っているセクシュアリティに関する活動にもつながっているように感じます。

(2) CHARMでは昨年行われた「森を創るプロジェクト」に参加させていただき、Social connectionなどでもお世話になりました。多くの『人』と出会わせていただいています。

(3) 自分を知ることの大切さや、気づきを本当にたくさんいただきました。自分の性や様々なことを深く考えるきっかけを下さるといえるか・・・！新たな自分を知ることができます。また同時に繋がる嬉しさを感じています。多くの方々に出会えたことが本当に嬉しいです！

(4) 引き続き様々な「繋がり」を創りながら、活動に関わらせてもらいたいと思っています！色々なことを一緒に考えていきたいですし、学びたい！

(5) 最近「麴作り」にハマっています！醤油麴・塩麴・玉ねぎ麴など・・・発酵食品の凄さに驚いています(笑)

おすすめの本は、最近読んでいる「頬に哀しみを刻め」という本です。人種やセクシュアリティへの差別などが題材になっている小説で深く考えさせられます。現在も読み進めています！

(6) CHARMの活動へ参加したあとは、必ず自分と向き合い、もう一人の自分と語り合っているような感覚になります。教わることや発見がたくさんあって・・・とても大切な場所だと思っています。あと皆様との時間をたくさん過ごせたらなと勝手に思っています！今後ともどうぞ宜しくお願い致します！



② 松浦 基夫 (まつうら もとお) さん

(1) 2002年、CHARM発足と同時に始まったSAT(土曜日常設HIV検査・相談事業)への参加に誘われたのがCHARMとの出会いです。

(2) 理事長をしています。(ほかには何もしていません)これまで参加した主なプログラムは、SATとひよっこクラブです。

(3) 職業柄、付き合いは医療従事者という狭い範囲に限られる面がありましたが、CHARMに参加して、ほんとに多様な人々と交流することができました。

(4) 理事長をだれかに引き継いで引退かな。

(5) 好きな食べ物：美味しいビールにあえば何でも。

好きな人：岡村昭彦(フォトジャーナリスト)梁石日(小説家)(二人とも死んでいます)

(6) 今後の主要な課題は、一つは今後増加するであろう外国籍HIV陽性者に対する支援、もう一つは高齢化するHIV陽性者に対する支援でしょう。前者については、4月から新たにマルチリンガルなスタッフが加わることで活動の幅が広がりそうですが、後者については、榎本さんの「家をつくる」案が頓挫して以降、具体的なプランがないように思います。みんなで知恵を出し合ってください。



③ 井上 維佳 (いのうえ いか) さん

(1) スタッフの庵原さんのお誘いでCHARMのことを知り、仕事をさせていただいています。

(2) 中国語の医療通訳(同行・遠隔)、相談員、翻訳、研修のお手伝い。

(3) 外国人患者は、初めて日本の病院を受診する際、治療や医療費、医療スタッフとのコミュニケーションなどについて、皆不安で心配な表情をされていました。しかし、CHARMのスタッフや通訳者の働きによって、患者さんが医療側とコミュニケーションを取れて、日本での受診に次第に慣れ、落ち着いて穏やかな様子になっていきました。患者さんのこのような変化を見て、CHARMの仕事をやってよかったと思います。



(4) 患者さんに寄り添って、HIV感染者でも安心してみんなと同じ生活ができるようにお手伝いしていきたいです。

(5) 日本のうどんが大好きです。寒い冬にだしの効いた温かいうどんは体を温め、暑い夏には冷やしうどんが涼を感じさせてくれます。一年中よく食べています。

(6) これからもCHARMのスタッフと協力して、外国人HIV患者さんが思い悩むことなく検査、治療を受けるように頑張りたいです。

・誰もが「個人のせい」にされない社会を目指して

QWRC(くおーく)は、2003年4月にオープンした、LGBTQなどの多様な性を生きる人々やその周辺にいる人と、女性のためのリソースセンターです。私たちはフェミニズムの視点を基盤に、多様な性のあり方が当たり前で尊重される社会の実現を目指して活動しています。

活動のモットーは、「LGBTQ×生きづらさが、個人のせいにされない社会にすること」です。LGBTQであることに加え、障害、疾患、年齢、家庭環境など、複数の属性や困難が重なり合うことで生じる複合的な課題に着目しています。生きづらさの原因を個人の責任に帰結させるのではなく、構造的な課題として捉え、誰もが自分を責めることなく暮らせる社会の創造に取り組んでいます。

・多様なニーズに応える「相談」と「居場所」

QWRCでは、相談、居場所、自治体や他団体との協働、啓発、人材育成など多角的な事業を行っています。相談事業においては、若者にとってアクセスしやすいツールであるLINEを使った相談「にじいろ Q LINE相談」、障害福祉サービスとして計画相談支援を行う「にじむすび」、心理士によるカウンセリングを行う「にじのそら相談室」、さらに外部委託による相談事業など、多様なチャンネルを設けることで、より多くの人々がアクセスできる環境を整備しています。

居場所事業では、誰でも参加できる「カフェドQWRC」や「ボードゲームな夜」のほか、セクシュアリティとメンタルヘルスの悩みを併せ持つ方が安心して話せる「メンヘル」、LGBTやそうかもの18歳までの人の居場所と保護者の会、「カラフルU-18」と「U-18保護者会」など

現場のニーズから生まれた多様なプログラムを展開しています。

・専門性と当事者性を活かした社会へのアプローチ

QWRCの取り組みにおいては、専門性と当事者性のいずれも大切にしています。福祉などの専門性を活かし、対人援助職向けの講座や交流会を開催することで、支援現場で孤立しがちな援助者同士が顔の見える関係を築けるプラットフォーム構築を目指しています。

LGBTQの人々は、福祉サービスに繋がってもセクシュアリティを安心して話せず、それが健康や命を脅かす要因となることも少なくありません。その中で、LGBTQが安心して利用できる社会資源を広げていくことを目的として「社会資源LGBTQフレンドリー指標」の事業の取り組みを行っています。LGBTQフレンドリーな事業所の「見える化」を通じて、当事者が安心して繋がれる資源を可視化し、マイノリティ性が重なることで生じる周縁化を食い止めたいと考えています。

その時々々のニーズを敏感にキャッチし、変化し続けるQWRCの活動に、ぜひ関心を寄せていただければ幸いです。



NPO法人QWRC
<https://qwrc.org/>

こんにちは。アンニョンハセヨ。私は同志社大学社会学部社会福祉学科の森田陽花と申します。挨拶でもあるように、本名は李陽花であり、私は朝鮮半島にルーツを持つ在日コリアン4世です。私は、幼い頃から、自分はマジョリティと違う個性を持っていると誇らしく感じていました。一方、その「違い」によって時にはSNSで素性が分からない人から傷つけられ、国籍条項や名前の2つ使いによって出来ないことも多いです。ここから、日本の在留外国人が抱える国籍、言語、文化、宗教など様々な困難を解消できる多文化ソーシャルワーカーになりたいと思うようになりました。そこで、今年度、社会問題実習という授業を通して、在留外国人が安心して医療を受けられない問題について、CHARMで1年間の実習をさせていただくことになりました。

まず、CHARMの支援内容やHIVや他の感染症の概要について等、勉強させてもらいました。感染症に対して一切知識がなかった私は、知る機会がなければ目の前の友達やクライアントなど大事な人を傷つけていたのかもしれないと怖くなりました。そのため、より一層あらゆる病気や障害、文化や言語などを勉強する気力が上がりました。また、ケース

会議の参加を通して、海外で治療を受け日本でも継続する場合、免疫機能を表す数値が高くなり基準に相応しないため身体障害者手帳の申請が出来ないことや、いまだ存在しているHIVに関するスティグマなど、人権に関わる課題の多くを知り、社会と制度の不条理を感じました。加えて、国民健康保険の加入は住民登録を済ましていることが前提ですが、それが出来なかった在留外国人について学んだ後、区役所に聞き取り調査に行った経験は、私のこれからの人生に関わる大きな勇気をくれました。それだけでなく、「森を創るプロジェクト」の研修では多様な方向で人の尊厳や権利を守ろうとしている人々の話を通して、新しいことへの関心、そして人との繋がりを持つことができました。

最後に、今回の実習では、病気や感染症などの本人の意思でなく生まれ持ったものや突発的なものも含めて、それが理由で差別・排除が起こってはいけないものだとの原点に戻されました。これからも、CHARMで学んだ知識や経験を踏まえて、関わる人への尊敬をわすれずに、目の前の課題だけでなく社会にも働きかけていけるような多文化ソーシャルワーカーになりたいです。



事務局から From CHARM Office

CHARM会員総会2026のご案内

日時：2026年6月6日(土曜) 14:00-16:30

会場：日本キリスト教団浪速(なにわ)教会

*昨年と会場が変わりました。詳細は5月に2025年度年次報告とともに改めてご案内します。

2026年度CHARM会費、サポーター費納入のお願い

4月より新年度(2026年度)が始まります。継続して、ぜひサポーター、正会員としてご支援いただきますようお願いいたします。ことにサポーター費はさまざまな形で活動に関わっていただき、ご理解いただいた上での安定したご寄付となります。CHARMの活動をより広くわかりやすく紹介し、「共感」をご寄付で、皆さまに支援していただけますよう努めます。

会費、サポーター費は年度ごとに一回納入をお願いしています。サポーターA/BはCHARMに相談することなく、毎年自由に変更することができます。納入時にAかBを明記してください。

- ・サポーターA 3,000円
- ・サポーターB 5,000円
- ・団体サポーター(一口) 10,000円
- ・正会員 3,000円



ホームページでご確認の上、銀行口座、コングラント経由からクレジットカードでの納入も可能です。また、コングラントを通して正会員、サポーターは毎年の継続納入ができるようになりました。ぜひ、ご活用ください。なお、正会員からサポーターへの資格変更、退会を考えている方は、その旨、ご相談ください。

*会費、サポーター費の他に「ご寄付」に関しても、コングラントの「寄付をする」を選択されますと、《今回のみ》に加え、《毎月》《毎年》をどちらも1,000円以上で継続してご寄付いただけるようになりました。ご利用いただければ幸いです。

振込み先

Bank Transfer Information

- a) 郵便振替口座 Postal Transfer Account
口座名義 Acct Name 特定非営利活動法人CHARM
口座番号 Acct No. 00960-0-96093
- b) ゆうちょ銀行口座送金 Japan Post Bank Account Money Transfer
【店名 Branch Name】 ヨンゼロハチ 【店番 Branch No】 408
【種類 Type】 普通 【口座番号 Account No.】 3655236
【口座名義 Account Name】 トクヒ) チャーム

編集後記

熊本で開催された日本エイズ学会学術集会・総会でCHARM事務局が発表したポスターが2年連続の優秀演題賞をいただくことになったことは大きな意味があります(P.7)。海外に移住し、勉強や仕事等をすることがごく当たり前になっているこの時代において、安心して暮らせるように社会や制度も合わせて変化していかないといけないと思います。CHARMが日本WHO協会の「だれひとり取り残されない外国人医療」事業の実行団体に選ばれたことは、そのような社会の実現への突破口になるような気がします(P.2)。また森を創るプロジェクトが継続されることで次の企画が楽しみです(P.4)。(ポ)

編集者：ポップ

校正：前田

発行：特定非営利活動法人CHARM 〒530-0031 大阪市北区菅栄町10-19

Tel : 06-6354-5902

www.charmjapan.com